

希望の松

愛知淑徳学園理事長・学園長

小林素文



ケパニワイ公園がハワイのマウイ島にある。そこはかつて古戦場で、ハワイ島のカメハメハ王がマウイ島の王とハワイ全島の覇権を巡り争った。西洋人のもちこんだ武器も用いた壮絶な戦いによる、おびただしい数の戦死者により溪谷の水がせき止められたことから、ケ(冠詞)パニ(止める)ワイ(水)と名付けられた。

古戦場は、その後、公園として整備され、砂糖プランテーションがはなやかな時代には、その労働者達の憩いの場であった。今は各国から集まった耕地労働者を称える、国ごとのモニュメントがある。

本年度から、20年以上遠ざかっていた講義を担当することとなり(地域文化〔ハワイ〕)、講義資料作成のために訪れたこの公園には、日本人、中国人、フィリピン人、ポルトガル人などの記念のモニュメントがあった。

日系移民を称える場所には、日系夫婦の像(写真下)と茶室があった。そして、その小高い場所に、一本の松が植樹されていた(写真上)。

横のプレートに「陸前高田町には七万本の美しい松並木があったが、3月11日の津波で流されてしまった。奇跡的に残った一本の松は、『希望の松』となっ

た。マウイの人達も被災された人達と同じ思いを共有すべく、ここに植樹するものである。」と英語で記されていた。

この松を植樹したのは、マウイ日本文化協会である。かつて日本から集団移民した人達の末裔は、今は米国人であり日本語を話す者も少ないが、祖先の文化や自分達のルーツを大切にしようとしている。

昨年8月に挙行された、松の植樹の日には「アロハ・イニシアティブ」の活動によりホームステイに招かれていた被災者も出席した。

「アロハ・イニシアティブ」は、大震災のあと、日系四世のリン・アラキ・リーガンさんなどにより組織され、最初のプロジェクトが、家をなくした被災者を招くことであった。

マウイには45人がホームステイをしたが、津波で妻と幼な子を失った一人は、結婚式をあげたハワイ、妻と一緒に走ったホノルルマラソンなど、思い出の地で、再び、心の中にいる妻と子とともにマラソンに挑戦すべく、マウイの空の下で走っていたという。

サーフィショップを営んでいた人は、店と祖父を亡くし、大好きなサーフィンをする気もなくなっていたが、マウイのサー

ファー達の熱心な誘いで、再び始めることができるようになり、復興への気力が甦ったという。

陸前高田の『希望の松』は、根が塩水でいたみ、その寿命は余り長くは続かないと診断された。が、その松ほっくりから種子をとり、21本の苗が育っていると報道されている。

日系移民の孫やひ孫が、そのルーツを大切にしているように、『希望の松』の苗たちもきつと成長し、希望のともじびを照らし続けるであらう。

マウイに植樹された松は、被災した人たちの痛みに共感し、行動できる人間の素晴らしさの象徴である。植樹された地がケパニワイという血なまぐさい由来の古戦場だけに、まだ幼い松が世界の平和を願う『希望の松』として、育っていくことを心から祈った。

